

受講番号 19106 学校名 県立高知南中学校 氏名 竹本 佳奈

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 27名
 科目名 1年生 単位数(授業時数) 4時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course 1

クラスの様子・特徴

様々な問いかけや応答をする一部の男子がクラスの雰囲気や和ませ、声を出すことの抵抗感を少なくするためのよい影響を与えてくれているが、全体的に生徒の声が徐々に小さくなってきている。ペア活動では、ペアを固定しなくても取り組むことができる。

問題の確定

発音練習のとき文字に注目できなかつたり、声が小さい生徒がいる。テストで文字や文章が正確に書けていない。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学カデータ
単語テストを実施。Unit1から出題し、日本語にする問題5問、英語にする問題5問。音声のみや視覚を利用した発音練習と比べ、単語が読めない(よって意味が分からない)、書けない生徒が多かった。音声の練習もマンネリ化し、全体的に声が出ていない。	英語を身につけて使えるようになりたい(特に会話をしたい)と全ての生徒が答えており、英語学習に対する意欲は高い。英語の発音、イントネーションや文字・文章の読み書きが難しい点として上げられ、日本語と違う点が生徒の不安の原因になっている。	同じ内容の単語テストを2回、約1ヶ月間隔で行った。第1回目の後、単語リストを与えて、毎授業5分間書いて覚える時間を設定した。覚える時間を設定した後の2回目は、高得点の人数が増えた。

リサーチ・クエスト

どのように指導方法を工夫すれば、正しいスペル、正しい語順が定着するか

仮説・実践・検証

仮説1	実践1	検証1
音のインプット量を増やすことで、英語の音に慣れ、音が定着する。warm upで用いるプリントの音確認を必ずしてから、発音練習をする。文章や表現に応じて読み方の工夫(スラッシュ、チャンク、シャドーイング)をし、単語のまとまりや意味を意識させた発音練習をする。	1. 教科書に出てくる語句や表現を中心に、新出、復習を取り混ぜて音のインプット用プリントを使用している。授業のwarm upとして教師のリポート練習の後、1分間各自でたくさん言えることを目標に発音練習を行っている。2. 意味のまとまりを意識しやすいように、教科書本文に日本語を入れたプリントを利用。イントネーションやスラッシュを生徒に書き込ませて、発音練習で活用している。	1. 音のインプット用プリントは約1週間、同じ語句、表現や文章を発音するので、たいていの生徒は回を重ねることに読むスピードは速くなっている。個人読みで行ったので、読む回数は生徒のモチベーションによるところが大きかった。2. ALTとの個人面接の形態で教科書本文を目標70秒で読むリーディングテストを実施。テストに向けてプリントに記入した発音の留意点を意識して練習する生徒が多かった。
発音練習の後に書く時間を設定することで、音と文字の定着がスムーズになる。書いて覚えることに集中するような時間設定にする。音と文字の一致を図るためにディクテーションを行う。	音のインプット用プリントを利用して、発音練習後、筆記練習用のプリントに5分間書いて覚える時間を設定した。書いて覚える活動は個人的な学習だが、果たして生徒各自に任せてみても、自主的に取り組むのは英語に興味のある生徒ぐらいで、たとえば単語テストの直前であったとしてもなかなか書いて練習する時間を全員に求めるのは難しい。そこで音の確認の後、個人のペースで5分間を使えるようにした。	ほとんどの生徒は5分間集中して書いていた。しかしスベルミスのまま書き続ける生徒もいた。そこで3回目までは書いて覚える時間を設定し、4回目は一度きりしか見ずに書いてみるという方法で、3分間で数(量)よりも正確に書けることを目標としてチャレンジさせた。音のインプット用プリントの1シリーズのよいしめくりとなっている。ディクテーションには取り組むことができなかった。
小テストを定期的に行うことで、目標が設定でき、覚えようとする意欲につながる。曜日を決めて、定期的小テストを行う。一度きりでなく、出題の仕方を変えて同じ単語や表現を数回扱う。	覚える語句を確実に増やすことを目的として、夏休みに100を超える語句、表現を覚える課題を出した。その中から100を選び、小テストを行った。小テストは成績にも組み入れることから、1年生なので10問、10回シリーズのテストとした。	小テストは金曜に実施し、10点満点以外は翌週水曜に再テストを行った。多くの語句を書く機会を与えることにはなった。テストが負担となる生徒に達成感を持たせたかったが、そのための取り組みは実践できなかった。事前に予行をして小テストに臨ませる、または不合格者が対象の再テストだけでなく、全員にもう一度同じテストにチャレンジさせる繰り返しや、出題の仕方を変えて同じものを扱うことが授業の中では設定できなかった。

研究の成果

生徒の好きな「音」をうまく活用して書くことにつなげていくことに重点的に取り組んだ。warm upで毎回使用している音のインプット用プリントは非常に有効だと感じた。繰り返し取り組むことで英語が苦手な生徒でも、まず音は体の中に残ったと思われる。授業で学習するすべてのことを、本当は書けるようになって欲しい。毎日発音練習している20問を1週間かけて書くことは、地道な活動だが、学習習慣ができていない生徒にも書く機会を与えることとなった。さらにそれをチェックする取り組みを始めてからは、生徒が書いて覚える目的を持てるようになった。

今後の授業改善の課題

音のインプット用プリントの取り組み方にもバリエーションを持たせて、生徒を飽きさせない工夫が必要だと感じた。これまで個人で発音練習していただけだったので、ペアで確認することで助け合いや競争意識を促し、変化をつけられると思う。小テストでは1度きりではなく、また不合格だったための再テストでもない、記憶に残していくための繰り返しを行ってみたい。英語を使用することができることを目的としたテストを実践したい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-831-2811